

# 第11回「文芸思潮」現代詩賞 発表

## 第11回「文芸思潮」現代詩賞

### 最優秀賞

第一回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで今年も日本全国および海外から五七〇名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、九月二十七日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今回も佳作・入選レベルの層に作品が多く集まったことから、昨年に引き続き「佳作」「入選」としてより幅広く顕彰することになりました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェブおよびインターネット誌上に掲載させていただきます。

現代詩賞の授賞式は、まほろば賞、エッセイ賞、イラスト・漫画賞と併せて明年二〇一六年一月一日（金曜日）午後二時より東京都大田区下丸子の大田区民プラザにて行なう予定です。今年は大田区民プラザ改修工事のため、ウィークデーしか会場が空いておらず、ご不便をおかけしますことを深くお詫び申し上げます。受賞者以外の方も御参加できますので、親睦を兼ねて、お誘いの上ぜひ御来場ください。

第十二回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

### 優秀賞

「受胎」「ランドスケープ」「ある日」

由木名緒美（福島県会津若松市）

「一周、あるいは一瞬で季節はめぐる」

桜川涼子（佐賀県杵島郡）

「へのへのもへじ唄」「はてるともなく命」

「白い腹」 後藤順（岐阜県岐阜市）

「誕生忌」「ひぐらしのいも」「死児のた

めのおもちゃ箱」舟橋空兎（愛知県尾張旭市）

「水飴」「放課後」「頭巾」

草野理恵子（神奈川県横浜市）

### 奨励賞

「ブラッチャンペンイント氏の戦き」

鈴木シユウ（東京都品川区）

「奏楽」「風紋」「光の窓」

青木由弥子（東京都大田区）

### 最優秀賞

「技芸天」「燕鳥」

清水一美（東京都立川市）

「くわいえつとていくおふ」

「ゆにばーさるきっちゃん」

「らふんつえる」

戌丸ぜの（山形県寒河江市）

「夢の跡」「鳥の形」「駱駝の眼」

遠藤芳子（東京都狛江市）

「黒い揚羽を頼って」

高橋朋央（岡山県岡山市）

「アウラの塔」「ホラーサイバイバル・エネミーサッチャー」「異世界で会って、せめて異世界で在って」通称水飴（東京都板橋区）

「種」「春の憂鬱」「いつか」

麻生ゆり（福岡県北九州市）

「レクイエム錠20mg」「遊びと夢」[impluvium]

（雨ノ降り込ム庭） 浅見龍之介（埼玉県草加市）

「Single Seed」「Angel」「A」

中村郁恵（北海道札幌市）

「終わらない春」「発作」「フラッシュ／バック」

日疋士郎（神奈川県相模原市）

「レジン」「ジャック」「受刑」

深町秋乃（熊本県熊本市）

「取りつく島」「遅刻」「免責事項」

江田つばき（千葉県市原市）

選評



松尾真由美 まつお まゆみ

1961 北海道生まれ  
詩集『燭花』（思潮社）  
詩集『密約—オブリガート』（思潮社）で  
第52回日氏賞受賞  
詩集は他に『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』  
『彩管譜—コンチェルティーノ』『睡濫』  
『不完全協和音 consonanza imperfetta』  
『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊  
のはるかな記憶を』（すべて思潮社刊）  
BOX詩集個展用パンフレット詩集  
『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』  
現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）  
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）  
『小野十三郎を読む』（思潮社）『短篇集  
夜』（驢馬出版）『ふるさと文学さんば  
北海道』（大和書房）  
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員

独自性を生かすこと

松尾真由美

詩の多様性。今回の選考では多種多様な詩作品を読んだという実感があつた。それは、年齢層の幅もひろく、詩を書き慣れない者も書き慣れた者も入り混じっているからだけではなく、各々の作者が醸し出す詩の性質が独自の個性として、こちらに受けとめられる作品が多かつたということだ。自由詩といわれる所以だろうが、詩には形式がない。散文詩でも行分け詩でも本来的に自由な言葉の運動であれば、詩といえる。ただ、本来的に自由な言葉の運動というものを身につけるのは容易いことではなく、書きつづけることで詩想が書く呼吸にのついていき、その呼吸（リズム）は作者だけのものだから、そこで自ずと個性も生まれてくる。そして、それは作者が詩と格闘しているという証ともいえ、読んでいてすがすがしい。

ところで、気になっている問題がひとつ。ペンネームのことである。応募者の中でもかなりの人が使っているし、これから応募する人も使うことが予測できる。私はどんなペンネームでも気にならない性質であるが、詩の場合は小説と違い、投稿欄などで一昔前だと「こんなペンネームをつける人間はとらない」と選者が明言し、実際にその後、その人は選ばれることがなかった。厳し過ぎると思つたが、詩は言葉ひとつでも悩むことが多い。ペンネームも詩作品の延長にあると考えれば、言葉のセンスを問われて当然ともいえる。ペンネームは熟考してつけること。そして一度つけたペンネームは変えない方がいい。たとえば、以前の詩からの脱却に合わせペンネームを変えることもあるだろうが、もし、前のペンネームで詩集を出していた場合、詩集と詩集のつながりが消えてしまい、現在のペンネームでの詩集に惹かれた読者がその作者に興味を持ち、前の詩集を読みたいと思つても手掛かりがなくなる。作品は発表してしまえば作者本人に関係なく独り歩きをする。そこで大切になるのは作者名になる。読者は作者名を覚えて作品を探す。見知らぬ読者がいるということも肝に銘じてほしい。作者名（ペンネーム）はそうした読者たちとの架け橋になっている。これは、詩の一読者として自分に置き換えれば分かることだと思う。好きな詩集に出会い、その作者を知り、そうすると以前の作品も読みたいという欲求が生じるものだ。同じ作者の詩集を何冊も読み、一詩人の変遷を感じ取ることはとても勉強になる。いままらインターネットで検索すれば簡単に調べられるので、こうした読書方法も読書の時間に加えてほしい。講評に入る。当選作の戌丸の氏の「ゆにばーさる きつちん」は三作の中で完成度が高く、詩の面白みという点を重視した。戌丸氏は詩を変えようといふ苦勞してきたが、氏の場合は少ない言葉数で余白を読ませるというよりも、詩空間の広がりの中で自分の言葉を生かす方が作品も個性が出る。以前のような混沌とした言葉の飛翔ではなく「ゆにばーさる きつちん」では自由な言葉の運動としての落ち着きも見られた。詩作の現場感覚がそのまま言葉とつながることで詩を語り、主体（私）と客体（あなた）の関係も個人的なものというより作者と読者の関係性を浮き上がらせ、そうした中で主体の揺らぎは「笑う」「にっこり」と自らを開き、逡巡や挑発があつても他者を許容する素直な明るさがある。それが作品の膨らみとなつている。コーヒー、キーボード、ケータイという身近なもの（具体

佳作

- 「アラベスク」「エロティック」 渡辺ゆふ
- 「憂夏1」「憂夏2」「憂鬱」 添美
- 「春望」「慟哭」「夜明け」 宮下萌
- 「俺の心臓は魂で」「結婚式」 蒼井坂じゅり
- 「駅I」「駅II」「駅III」 北原満
- 「大きな壁に向かつて」「月はみている」 清原雅富
- 「北極振動」「ポアンカレの糸」 浅野慎太郎
- 「母と休日とわたし」 鳥羽アザ美
- 「光源まで」「セビーリヤの太陽」 石井春香
- 「自死の兄」「夢追い」 寒川靖子
- 「酔ふてさうらふ」「あの蓮は」 高藤典子
- 「Calling」「3月の詩」「stella」 アイラ・アリス
- 「電車に乗ったある雨の日の心象風景」 弥生雨美
- 「サンドラホテル」「商談あるいは」 田中淳一
- 「羊歯の花」 関根裕治
- 「寄る辺なき」「そのひとは」「円環」 大山元
- 「均衡点」「不動点」 優谷明広
- 「空の礎」「世界認識のまわり」 千草ちとせ
- 「低気圧」「ぬかるみの乳歯」 波の源
- 「へびさま」「つばさはないけれど」 灯千華
- 「風の電話」 柴田あき
- 「ノラ犬」「ようかい」「宴」 岡西通雄
- 池山弘徳

- 「12月の疼痛」「蚊柱」「溺れる人魚」 そらの珊瑚
- 「水槽」「辿る」「旅路」 立葵
- 「三十路盤」「新しい光合成のしかた」 町田理樹
- 「ふと、立ち止まれば」「寄り添いながら」三浦恵子
- 「慟哭」「射手」 十路田道広
- 「百番線のムカデ」「明るい町」 菊池智弘
- 「フットボールが上滑りする」 蒼井未龍
- 「二つの2の狭間で」「summer ROSES」 緒川けい
- 「灰色のコーク」「藍色のメツコーラ」 岡崎師
- 「愛の位相多様体」「Human age」 Keisei
- 「夜明けの國」「私、発光体」 北埜ユリコ
- 「嘘憑き」「虚空探査」 古田ひさし
- 「雪と国」「ワクチン」「意味のキー」 nerongree
- 「母と休日とわたし」 鳥羽アザ美

性)があることで「非日常」が宙に浮くのではなく詩空間を地に戻し、また、この作品は書きたいものを書ききつた感があり、だからこそ、「やっ」とおはようと、云えそうです」という秀逸な終行がでたと思う。作者はこの作品に対する書記の感触を忘れないでほしい。同じく当選作の清水一美氏の「伎芸天」は漢語を駆使して、独特の世界観を出す。作品の完成度が高いのは言葉のリズムが一定しているためもある。歩調のように崩れないので、読者も読みづらい漢字があつても主体とともにイメージを追える。伎芸天とはシヴァ神から生まれた天女であり、伎芸修達、福德円満の守護善神とされる。その天女とともに主体は静謐で大きな闇にいて、仏教をもとにした語りは非在のものをイマジネーションでかたどり、読者にも現実からかけ離れた情景を見せる。それは暗い



入選

- 「ふるさとの風」「土に還った父」 葛岡昭男
- 「ふゆのはなびら」「雪を降らせた」 高橋杜子美
- 「血」への回答「信仰」「幻想組曲」 芳賀哲也
- 「そつと涙ぐむ」「もうつかれてしまった」 添田美世子
- 「言の葉によせて」 阿古詠治
- 「灰色」「望まぬ海」 石留栢榴
- 「ケイへ」「同時代」「詩人」 関戸都志正
- 「今日を受領する」 いしせきけいこ
- 「刃の蝶」「湖面の天体」「薄荷の詩」 月許温授
- 「怪獣」「方言詩 ぶらんぶらん」 滝野澤弘
- 「閉じこもる心」「喋らない君へ」 日野雄啓
- 「ギンドロの丘紀行」 八重樫克羅
- 「冬の沼」「パラレルな画布の光景」 日野笙子
- 「救助と幸福」「零歩」 西村奈央
- 「巨大肝嚢胞」 西條由美子
- 「石の軌跡」「命題」「木橋」 大西久代
- 「孤村点描 農の村」 佐藤清助
- 「たのみます」「西域の少女」 深山斐太
- 「しらす」 あおい満月
- 「こと たま」「花は」 今田真理子
- 「狂人静養日記」「何度目の春」「負け犬」 森破裂
- 「花束」「菓の架け橋」 久井千岳
- 「太陽を信じる桜(ひと)」「冬の風鈴」 原田あき
- 「心の翼」「君に戦場で会ったなら」 まーっん
- 「酷暑の想い出」 田舎者

富田実加子  
行待文哉  
山崎文男  
清水A璃阿  
安藤緑青  
宮田まさゆき  
谷村光  
立山紘  
三川嶺  
瓦穀紗樹  
千葉颯丸  
いとうよる  
加藤あや  
古屋朋  
福島敏真  
阿江栄章  
伊豆野丁字  
布目有里  
西嶋颯  
城戸祐介  
渡辺八畳  
勝田愛  
中野橙  
佐々木万里子  
月白尚  
燈籠屋のかた  
北未知子  
北村光



と詩(無限)を重ねあわせ、詩の創造として、こうしたテーマを見いだす作者に現実への主体的な挑戦を感じる。清水氏もこの作品は書きたいものを書ききった感があると思う。その感触を忘れないで、独自性を生かすためにこの世界観を追求していただきたい。

優秀賞の草野恵理子氏の「水飴」は不可思議な世界のゆがみから、人間の怖さと人間の悲哀が出現する。発想自体が奇抜であっても、叫ばず静かな主体の声描写の丁寧さと相まって、ないであろうような光景も説得力を持ってくる。この作者は少しの悪意にも敏感なのかもしれない。そうした敏感さは詩人体質であることを明かして、氏の応募作品は三篇とも一定の力を保っているが、「水飴」を選んだのは対象に対する距離のバランスがいいからだ。ゆがみも静かさも草野氏独自のものとなっているが、描写に固執するあまり、対象と距離を取りすぎると読者も対象から離れてしまう。「頭巾」などはせつつかくの世界が心に響いてこない危うさがまだ感じられる。草野氏はここ何年かで力をつけてきているので、あえて苦言を呈してみた。

優秀賞の桜川涼子氏の「なまえ」はユーモアに溢れているが大きな主題を扱っている。私たちはいつも言葉を置くことで決定させてしまう何かから逃れられない。詩人はそのために苦心を強いられるのだが、この作品は言葉の指示性を避けることの意味で成立していて、非常に実験的だ。それを会話体や擬音で小気味よく、柔らかく、面白く表わしている。作者の諧謔精神はテーマを深く感得している証左であって、詩でなければできないことを楽しんで読ませていただいた。優れた作品だと思う。

優秀賞の後藤順氏の「へのへのへへ」は字が読めない祖母の哀しい状況を伝えてくる。主体が感情的にならず、憤りも憤りとして発散するのではなく、客観的に描いているがゆえに彼女の人生を読者も共有できる。押しつけられた現状に逆らう術もなく従順に生きた日本の女性像が浮かんでくるのだ。へのへのへへ唄という遊びを取り入れることで、柔らかさを作品に取り込んで、それが親愛として感得され、子どもの頃から働きづめだった祖母へのオマージュとして、読者は感動を手渡される。

優秀賞の舟橋空兎氏の「誕生忌」は以前の静謐さを湛えた詩作品とは違い、ひらがなの多用で作品に動きを与えている。この言葉のうごめきですでに完成形であるのに驚いた。そして、物語は遊戯感覚でいきいきと世の常識を攪乱し、にんぷにおんなもいれればおとこもいるという、まぼろしのくにという設定が時代性を無効にし、神話的というより神話の諧謔をかたどる。あからさまな異世界の中で誕生が葬式とつながり、生と死を祭りとして描くことで、まぼろしのくにという実体のなさに生の実存がこめられている。

優秀賞の由木名緒美氏の「ランドスケープ」はホラー的な描写に読み手は胸を突かれるか、眼をそむけてしまうかで、自ずと読者を選んでいる。表現が過激であれば詩の内実も激しいものとして期待される。そのことは自覚すること。この作品は主体の持つ大きな不安感が過激さの裏側にあり、書きたいものに主体が真摯に対峙していることで、作りものではない痛みが浮き上がる。だから、針を心臓に突き刺しても脚を折っても、事象は成立するのだ。

奨励賞の日疋士郎氏の「フラッシュバック」は言葉の勢いに直截さが合わさることで、饒舌さや毒舌さに切迫感がともなう。自在性を感じるのには詩の言葉に身体がついているからだろう。同じく奨励賞の青木由弥子氏の「光の窓」は、情景は綺麗で抒情もほのかに浮き上がる。三篇とも母の孤独を滲ませていて、喪失感にいたるまでの描写はとても丁寧だが、もっと我を出した方が、喪失の混濁自体を描いた方が、作品に奥行きが出ると思う。「波紋がひろがる」この波紋こそ描きたいものではないだろうか。奨励賞の鈴木シュウの「ブラッチャンベイント氏の戦き」はどうしようもないことの深みを黒人に仮託しつつ、彼が歩いているような言葉のリズムで彼の人生を語り、歴史把握が時空を広げていく。想像のうちに悲哀を飛翔させ、それを冷静に描くことで虚構が説得力を持ち、人間を描ききっている。



- 「巨人の嘆き」「IKB」「女の贖い」
- 「夏がくる」「愛児」「縫う」
- 「老いを美しく」「残す言葉」
- 「中性子爆弾が落ちた日」「花」
- 「やがて浄化されゆく」「Our stealing future」
- 「夏の宿題」「消エテイク女ノ物語」
- 「殺戮の詩」「反逆の詩」「退廃の詩」
- 「リバース」「パドック」
- 「闘いに出る時の詩(宣誓)」
- 「頼りない孤独」「記憶は沈んだ」「足枷」
- 「葛藤」
- 「パルミラ」
- 「秋風」「柿の木」
- 「酸素」
- 「群れ」「何処へ」「離れイタコ」
- 「ブルース」
- 「インディアナポリス」「酩酊小町」
- 「窓」「部屋のかな」「はろーあげいん」
- 「光の王国」「弾倉にダムダム弾・愚力者の夜」
- 「予感」「犠牲と復讐」「再生のために」
- 「神秘よさようなら」「雪」
- 「プリズム」「海のなか」「名もない夕暮れ」
- 「コレクション」「開いて」「くゆらし」
- 「足」
- 「a星アクルックス実務認定証書」「星群探知機」
- 「奇妙にまばゆく」「僕のユーフォリア」
- 「サイコロ坂道、誤解堂」「ほのおのとり」
- 「灰色、孤独な世界」「空虚な蒼に触れる時」

北村光



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ  
 79 「流瀆の島」で群像新人賞  
 88 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンターネットワーク新人賞  
 2002 「鉄の光」で健友館文学賞  
 他に「ノンチャン、NONGCHAN」「ワットブノムへ」「破壊者たち」など  
 評伝「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」

## 乗り越えと停滞

### 五十嵐 勉

第十一回の現代詩賞は、応募数は前年をはるかに上回ったものの、優秀賞レベルの層はやや薄くなった。数が集まれば優れた作品も多くなるとは限らないことをまた示すものだったが、逆に佳作や入選のレベルは大賑わいで、それを落とすかひじょうに苦労するほどだった。このあたりの数が多くなったことは、全体的な層が厚くなったと言えるだろう。

今年の特徴は、受賞者別に見ると、馴染みの顔ぶれが多く、そのブラッシュアップまたは変異の過程がよく見られたということである。悪く言えばマンネリで、本質的に変わりばえしない停滞も一面では感じられた。ちなみに、奨励賞以上一八人のうち、前年の受賞者は十一人である。

たしかに、こうした詩のコンテストで上位に入賞するということはたいへんなことである。持っている技量の上に、意匠や技巧を凝らし、気迫も魂も込めることは、至難の業と言っている。昨年以上のできばえを發揮するのは、体調や生活環境以外に偶然も大きく作用する。それらの困難や壁を乗り越えて成就するのは稀有なことと言わねばならないだろう。持続の苦しみもそこにある。

こういう困難に直面して、結果的に二つの様相がよりはっきり出ているのが今回の特徴とも言える。乗り越えをうまく成し遂げた者と、まだ変容の過程に苦しんでいる者との明暗である。

も覚える。さらに大胆な飛翔を期待したい。

舟橋空兎氏の詩は物語性を詩の中に持ち込んで、それなりの膨らみを持たせているおもしろさは買うが、言葉そのものに賭ける気迫が散漫になっている。もつと言葉の刃先を鋭く真剣の光を研ぎ澄ませてほしい。

草野理恵子氏の言葉は、陰に不穏が潜んでいる。言葉の飛翔感や屈折の色彩は乏しい言葉群の裏側に、重い存在が蠢いている。その危うさがいい。それが今回は特に不穏さを増して迫ってきている点で、深化を覚えた。この世界を進んでいくのは、苦しいかもしれないが、逆に言い切ること昇華される救いもあるはずである。さらに充実させることによって突き抜け、開けていく希望を託したい。

二つの様相のうちのもう一つを表すものは、奨励賞の浅見龍之介氏と日正士郎氏、また北埜ユリコ氏である。いずれも最優秀賞受賞経験者だが、浅見氏は「レクイエム錠20mg」など型に乗ろうとするゆらみを感じられ、日正氏の今回の詩は力が漲っているものの、パターンと技巧が前回と同じで鼻につく。北埜氏は新しい領域を模索中の感乱を引きずっている。ここから一步前進するのはきわめてきつい仕事だろうが、時間をかけてほしい。で、なんとか脱却して踏み出してほしい。

奨励賞の青木由弥子氏も前回に比べるとやや立ち止まっている。「風紋」「光の窓」などいい流れで奏でられていて透き通る飛翔が成功しかかっていたが、最後の決めが甘く惜しまれる。

今回実感派リアリズムの詩も貴重で、優秀賞の後藤順氏「はてるともなく命」は愚直な告白の中に喉元へ迫ってくるものがある。連続の優秀賞は立派で、腰を落とした姿勢がないとこまでは持続できないだろう。遠藤芳子氏の「駱駝の眼」も一貫して失ったものを追う、痛切な叫びを蔵して、胸を打つ。母の思いが命の連環となって空を駆け巡る反響がある。創作すること自身生き物であり、いつも同じように安定して生み出すことができないものではない。様々な条件によって制約され、うまくいかないことのほうが普通だろう。しかしそれを乗り越えようとするのもまた人間である。持続と創造の意志を貫いて、この世界に自らの世界を立ち上げてほしい。

清水一美氏の「伎芸天」は、一昨年の「蜘蛛」以来二回目の最優秀賞で、「乗り越え」の様相を輝かせているものだった。「文芸思潮」現代詩賞にはこれまで最優秀賞を二回受賞した詩人はいない。初めての快挙である。昨年の低迷を経て、ここまで到達した忍耐と努力は注目に値する。選考委員の立場から率直に言うと、二度目は渋りたくなる。他の人にこの喜びを味わってほしい気持ちもある。その壁を打ち破ってということとは、よほどのものがそこにみなぎつていないとむずかしい。しぜんに質的に最初の作品以上の内容が要求される。ここまで達していないと、その壁は打ち破れない。しかし清水氏の今回の作品は、それを成し遂げていた。古典的ではあるが、その荘重な調べのうちに揺るぎない緊密な言葉を連ねて、一つの詩の世界を構築している。「伎芸天」とは耳慣れない言葉だが、「ヒンズー教で、シバ神が天界で器楽に興じている時、その髪を生え際から誕生した天女」で「容姿端麗で器楽の技芸が群を抜いていたことから、技芸修達、福徳円満の守護善神とされる」とある(インターネット・ウィキペディア)。

しかし清水氏は、この言葉に暁の宇宙の壮大な空間を重ねて、奇跡のような時間の邂逅を、緊張感に満ちた生命の華として称え、その深奥を奏でようとする。ここでは天女は、この奇跡の中に現れる象徴的な比喩に過ぎず、その神格はむしろ悲愴化され、生命の祝祭と葬列との奇跡性を宇宙空間まで敷衍する触媒役を果たしている。そして「わたくし」もその奇跡の一環であることを受け止め、宇宙の闇へせり出していく決意が潔い。この清冽な切れと結晶度は二回目の最優秀賞に値する。

もう一人の最優秀賞、戊丸ぜの氏の「くわいえつとていくおふ」などの詩は、私はあまり評価しなかった。自分の詩の世界に行き詰まりを感じ、新たな領域を開拓しようとしている方向転換の意欲は感じるものの、「おーけい、いつも通りだ」などむしろぬるい言葉が多く、脱皮しているようには見えなかった。自分のペンネームを安易に変えてしまう姿勢も、基盤の浅さを感じさせ、力を失った言葉群がむしろ迷走中の印象を受けた。今回の受賞は、私としては真の脱皮を願うものとしての期待を載せている。

優秀賞の樋渡由江氏は、言葉の結晶性はまだゆるい部分が残っているものの、鮮やかな貫きが詩の閃きを大きくしている。この思い切った打ち出しの弧の運動性が広がり快感を感じさせ、もつと発展していきそうな可能性を予期させる。またもしかしたら散文の作品も書けそうな骨格の太さ



選考会風景



# 伎芸天

暁月の静謐に目覚める  
この広大な一基の棺に  
上弦の汀にさ迷う忘却  
その背を見送る一滴の  
昨夜降りた露玉を渡る  
煌びやかな銀河の沈黙に  
修羅に咽ぶ真裸な夜の  
円かなかの月の出に  
ほの白い闇に香る水系  
においやかな父母の死  
その骸に幸う餓鬼の視  
共どもの眼に刻まれる  
碧落の面に沈く系譜は  
み祖ら祝い祭る水焰に  
美しく流れの末を招来し  
照る月の虹に幻化する  
光の間に調べる天女の  
口の辺に佇まう沈黙に  
指先に結ぶ印を尋ねる  
結ばぬ詞に転ぶ六道へ

真直に自らを踏み出す  
み歩み立たす今一差し  
この測れぬ間にゆらぐ  
わたくしの玉の緒解く  
水の容は生まれぬ先祖  
幽明の汽水域に啓ける  
奥処も知れず頻く瑜伽  
ただその音のみ懐しく  
見合わせ訪ねる先の夢  
一つ二を結び一となる  
玉むす露の昨夜の光儀  
充溢する落下に浮かぶ  
この開け初める無間の曙  
閉ざされていく露玉に  
肌透く月の母差す際の  
後の汀に洗われる佛  
化粧し面に開く鏡なす  
水を托す内奥の眼差し  
再生の序へ鎮め祭られ  
逆様に眠り続ける死見  
その波状の葬列を送る  
暁星の見開かれた眼に  
未だしわたくしを問う

## 清水一美

### 受賞の言葉

ことばに巡り会うとき、驚き怪しむわたくしがいる。「初めにみことばがあった」。このことばを、人はどう聞くだろう。また、「人はパンのみにて生きるにあらず」を。パンのみにて生きるに、砂をかむ人がいる。そう、見える。当り前だ。信なければ、人はただちに生きる方を見失う。うたかたのことばは、広い門の扉を開く。信はいつくしんでこころし憤怒に焼かれ、安らぐ。それが、人の復興を生む。信たるところは、こころしたい。



清水一美

しみず ひとみ

1960 青森県八戸市生  
大学進学により上京  
英文学でジョン・キーツを専攻  
卒業間際、堀辰雄を知り、日本文学科へ編入学  
財団嘱託を経て、フリーの校正者に  
森敦を知ると、山での越冬を志し、八ヶ岳へ  
下山後、会社員  
やまとことばと、現代のことばとを模索中

透徹した祥に尽を聞く  
真白に祖ら玉敷く穹に  
天衣炎上し雲狂おすに  
飛火なし贄立つ餓鬼ら  
随喜紅蓮し立てる涅槃  
焔然り織り成す曼荼羅  
新たし煌びやかな碧落  
その際に白波立ち立つ  
月の知らず満ち干の海へ  
におい立つわたくしの  
送りを鑽仰する餓鬼ら  
屠る（ないわたくしの）  
序に続く尽きぬ諧調に

# ゆにばーさる きつちん

## 戌丸ぜの

時計の針のよりどころではなかった、  
 コーヒーいっぱい遮られた空間はつかのままで、  
 私の真上から、銀河系に変わってゆく傘、  
 星の光がいつもより凍てついていると感じました、  
 私の出した銀色のメールを、  
 受けとった、あなたの中のあなたの人。  
 流れるくらい前に、ひっきりなしにちりばめられた金平糖くらいも、  
 甘く食べられたのにね、  
 ただ星に似ている、と云う理由で。  
 かじかみました掌で包む切り取られた非日常、  
 透明に隔ててわけられていたけれど、  
 慣れてしまえばいつでもアクセス可能らしい、  
 慌ただしくコトバの波が、  
 揺れる躰を押し戻しながら、浮かぶ、  
 脳髓の深いところで、皆、つながっていることを確認して、笑う。

もうすぐ時間がたつ、  
 円錐状に創られた私の束に、浸されながらコトバを交わして、  
 ひきよせたブランケットのような夜の闇に身を隠す、  
 でも、光はどうしても、剥がしてゆくんですね、  
 優しく、触れながら私も。  
 届けられるコーヒーの香りに、遺体に似た私は、  
 やつと生き返っていくのです、  
 私は認めながら、自覚していくことをよしとし、  
 真上の銀河からの光が、スポットで照らしている、

私はもはや、あなたの腕に抱かれて。  
 とりとめのないキーボードの配列をくぐり、  
 ランダムに再構築していくことが日課となっていて。  
 手の届かないところにあつたものが、  
 一つのまにか近くなって、傍にいますよになりました、  
 私はもう、ひとりではなく、  
 ケータイの脆弱なつながりより、選択した私と私のリアルに的を射りました、  
 拡散してマクロにもしかり、  
 微分してミクロにもしかり、  
 私たちは、よくみればよく似た形をしているね、  
 ただ少し、規模が違うだけで。それは、ねえ、ひとりじゃないってことです、  
 ひとりじゃないけど基本、この銀河の下に独りいます、でも、  
 しばらく、待ってますから。  
 メニューを見て、しばらく呑んでますから。  
 手を当ててみる非日常の透明な切り取り線を、なぞっていく指を、  
 切る勢いで開いたと思っても、すぐ閉じていくんだよね、  
 だから、私は、みつからないんです、  
 につこり。  
 時計が途切れるままに止まりそうな音を聞いてきた、けど、  
 しっかりと抱きとめていただきましたよ、  
 やつとおはようと、云えそうです、

### 受賞のことば

トは以前、榊一威、と云う名でした。が、現在続いているトの深い変容の中で、もはや今迄の、榊一威、と云う名の型が自分にしっくりこなくなり、名に違和感をおぼえるようになってしまったのです。古くて使わなくなった重い荷物を削ぎ落とすように、トは今迄の名を手放しました。制限を超えて、静かなる脱皮、そしてはじまるテイクオフ。

選者の皆様、この度はトの作品を選んでくださりありがとうございます。作品もきつと喜んでいいます。



戌丸 ぜの  
いぬまる ぜの  
(旧：榊一威)

詩集「未来進行形進化」で山形県詩人会賞受賞  
 榊の名で、詩集「blent junction」  
 戌丸の名で、詩集「Quantum Integral」  
 いずれも郁朋社から刊行中



# 水飴

ところで君は何でお金を稼いでいたのだろうか  
水飴も売っていたかもしれない  
ただ僕たちは君見たさに集まっていたのだ  
こぶなのだろうか  
頭の一部分が妙に大きく膨らんでいた  
それとも君なりのおしゃれのつもりだろうか  
反対側の髪の毛を角の形に固めていた  
紗の目隠しを細い目の上に掛けていた  
そして体には似合わない大きな手で水飴を丸めた  
「あなたの隠れた部分が現れる」と小さな口でつぶやきながら  
僕たちは顔を見合わせ馬鹿にするふりをしながら頬を赤らめた  
コップの縁についていた赤い口紅の皺  
何故か見てはいけない生きもののようなだった  
目が合った時 君はすぐに下を向いて  
唾をつけた白く丸い大きな芋虫の指で水飴を巻いた  
水飴を受け取ったあと  
君の手の皺の中に埋まったお金を奪って走り去った  
みんなと同じように……  
夏だったはずだ でも寒かった  
僕の息に氷の色が混じっていた

しばらくして君は横たわったまま花びらのように広がっていた  
いや 腐敗した花びらだろうか  
もう足首を見つけない  
首と肩の境目から転がったものは赤い種だったのだろうか  
至る所 孕んでいる体  
落ちないように添えた左手は罪の形に変わった

「狂ったらしい」と うわさが反響した  
僕の裸足の隙間に飛び散った水滴が粘った  
合わせ鏡の中に無限の軀があった  
白い水飴のような抜け殻だった  
その顔を僕は半ば知っていたから  
鳥の死骸のようなふりをしてみんなといたぶった  
雨を言い訳にしながら……

君の細い目にかかっていた紗の布を通し世界を見る  
白く咲いた体を包むように粘ついた雨に変わった



草野理恵子

くさの りえこ

1958年 北海道室蘭市生まれ。新潟大学教育学部卒。  
白鳥省吾賞最優秀賞・優秀賞。白秋献詩特選。国民文化祭実行委員会賞。神奈川新聞文芸コンクール最優秀賞。かなざわ現代詩コンクール最優秀賞。文芸思潮優秀賞。詩集『パリンプセスト』にて横浜詩人会賞。日本詩歌句大賞優秀賞。ほか。

# 草野理恵子

## 受賞の言葉

この度は優秀賞を本当にありがとうございます。ありがとうございました。

障害のある息子の感染・発熱・発作に一喜一憂しながらその合間々に書き続けています。今日も書けます。書いていいのです。その自由が与えられたことに泣けます。鉛筆と紙は無限です。(想像力も無限であってほしいですが……)

明日もきつと、そのあともきつと「書く」ことができる。その僥倖への感謝を忘れずに書いていきたいと思っています。

左耳が嗤ってる そんな時は  
真鍮の針を心臓に突き刺して  
鼓動の波で全身を海にする  
皮膚という皮膚に群がる蟻が  
感情の熱で蒸し焼きになるまで  
ただ立ち尽くして真理の老木を凝視みつめしていた

本心の知れぬ知己達と  
一杯の聖水を回し飲みする  
誰がその結晶を吐き出すかは  
彼自身の哲学が決めること  
嘘は暴かれてはじめて独り立ちするものだから  
きつと誰もがその役を演じたがつてる

壊れやすい角砂糖が必要な時  
苦味は偶発ばかりを期待して  
ついには溶け合えない理性と渴望  
マーブル模様だけが一心に  
融合の核心を描いて見せた

\*

夕闇の街灯の下 時を止めてあの人が行んでいる  
我を忘れて声を上げれば  
傍観に目を光らせる鴉共を追い払うことが出来たけど  
背筋に響く無数の気配は  
一人取り残された私の肩に 漆黒のやさしい羽根を降り立たせた  
予知夢が花咲く午前0時  
街はなおも母体とはぐれて  
当てずっぽうな標識を乱立する  
今日産み落とした卵を  
明日羽あすばたかせるには  
もう少しばかりの躊躇が必要  
踏み留まるこの脚を折れば  
ほら、跪けるよ  
鉄筋製の十字架をかすめて  
満潮の月がさざめいている

# ランドスケープ

## 由木名緒美



由木名緒美

ゆうき なおみ

1999 若松市立女子高校中退  
清掃会社、飲食店勤務を経て  
病気により自宅療養

### 受賞の言葉

ただ茫漠と過ぎるしかない日々の時間  
に抗うように、言葉は詩の輪郭を模っ  
て目の前に立ち現れます。それは、生  
きる上での失われた平衡感覚の代償な  
のかもしれないし、歩みを進める過程  
での標識に過ぎないのかもしれないせ  
ん。言葉のささめきに呼吸を合わせ、  
一針一針縫うように行間を埋めていく  
作業には何物にも替え難い喜びが伴い  
ます。そのような、生の呼吸としての  
機軸を記す場を頂けた幸運に深く感謝  
すると共に、今後の発展に結び付けて  
いきたいと思います。



# はてるともなくなき命

真夏だからといって  
午前二時にも蝉がなきどおす  
亡き殻になった男の髪が折々動く  
扇風機の風にあわせ  
男の娘はぐんぐんと乳を呑む  
赤子の汗をふく  
土偶の顔がゆがむ  
孕んだ娘の腹を胎児がけるのか  
いっせいに珊瑚産卵のうねりが潮騒に  
点滴の音がやんだ  
銀河の端に男はたどりついたのか  
蓮の花魂を包む白々した男の顔  
血をはいたあの夏の日の  
洗面器に浮かぶまんまるい月に  
泣かされて泣かせた娘が  
庭で燃やした男の日記  
糞虫が揺れるほのかな口から  
ベッドの男は蘭玉になった  
病室から眺める  
娘が手をあげて溺れて  
通る花吹雪  
灯しても消しても天井の蛍光管は  
男をみつめる  
渡りを捨てた白い鳥が語る  
夢のなかに命を置いてきた昼寝覚  
寂しくなれば母の墓洗いにいく  
握る娘の手は男との思い出をふさぐ

一匹が一匹を呼んでじゃれあう犬でもなく  
ひとり男は酔いどれて  
ひとり娘は仔を孕み家を出た  
風が伝える  
孤島として父が臥せているうわさに  
月光がさす破れた障子から  
水をうまいうまいと呑む男に  
父の灯が切れかかる  
どれほどの  
命の輝きもない  
ちらほら若い芽が萌えても  
落葉の男はあるがままに枯れ逝く  
春の陽を胃の腑に灯す医師が首振る  
ちらほら命は土に還れと  
もう娘が咎める言葉は  
全身水浸しにどぶ川に流れる  
空の彼方から聞える木霊は  
男を誘う妻らしき白鳥のなき声  
男の煙が空に溶け込む  
ちらほら骨はできあがったろうか  
透き通った骨を娘は拾う  
古い鍵を捨て  
新しき命を産む鳥へと渡る  
海の底へ  
男の骨がたどり着くよう  
娘ははらはら骨を蒔く  
乳を赤子に与えては  
赤らむ夕陽の奥の  
産室がある島へ  
女のはぐくむ命の權は力強い



後藤 順  
ごとう じゅん  
1953 岐阜県生まれ  
文筆業 日本現代詩人会  
員・日本文藝家協会  
詩誌「ひょうたん」同人  
新詩集「追憶の肖像」ほか  
五詩集既刊

# へのへのものもへじ唄

尋常小学校もいけなんだ  
というのが 明治生まれの祖母の口癖  
この字はなんて読むんや  
と孫のほくによくきいた  
祖母は読み書きができなかった  
小作の百姓には勉強などいらん  
今でも仏壇からきこえる  
という祖母の父の声をまねては笑う  
折り込み広告の余白に  
祖母が歌いながら書いていた  
へのへのもへじ  
「へ」は眉毛 「の」は目 「へ」は眉毛  
「の」は目 「も」は鼻 「へ」は口  
「じ」は輪郭  
かなしいときは なみだ顔  
うれしいとき わらい顔  
畑仕事のひと休みに口ずさむ  
へのへのもへじ  
地面いっぱいできあがる顔  
雨がふれば百姓はよるこぶのに  
祖母は空にむかってかくまねる  
字かき唄に母がむせび泣いた  
おばあさまはたくさん字がかきたかった  
識字学級があったらな  
この国は軍靴で汚したあとも  
弱いものは縁の下でうごめくだけ

八十六歳で逝った祖母の  
へのへのもへじが  
へなへなとほくをじっとみる  
捨てるか迷った祖母の茶ダンス  
引出しにあった 母がみつけた  
紙くずは ばらばらにしたぼくの小学一年の  
こくごの教科書  
祖母が鉛筆でいくどもなぞったのか  
字は真つ黒にかたちをうしなって  
わずかな余白にあるのは  
「ごとうまさへ」という祖母の名前  
ようかきやつたな おかあさん  
母は大切そうにその一枚を残した  
へのへのもへじ  
おまえの唄はもう聞えない  
かなしくうつくしい  
祖母の「へいわ」という字はつたない

## 後藤 順

### 受賞の言葉

詩を書き始めて四十年近いが、これまでに「真実の詩」を書いた記憶がない。何かどこかで読んだような、誰かが書いたような。多くの詩集を読む程に、詩心の壁が壊れていく音が耳底に残る。だが、詩を読まないと、書かないと、精神の拠り所が消滅してしまう。今回の受賞を機に、新たな詩との格闘を血だらけになりながら、より孤独の旅へと歩もうと思う。あとどれ程この世に寄生するのかわからないが、生きた証の詩を残したい。

# 死鬼のためのおもちや箱

舟橋空兎

くらい産道をとおつていくと  
でぐちにはちいさなひつぎがあった  
よくみるとそれは  
おおきなおもちゃ箱のようでもあり  
だれかが入ると きめられているわけではないのだけれど  
ももいろの口腔をぼんやりひらき  
なきわめくこともなく  
しわくちャのもみじの手を  
にぎりしめたまま

さびしいうらやまのさんろくで  
からすがようきになきかわしている  
あれは凶兆ではなく  
いじらしいなきがらをことほぐ  
鎮魂歌 たべることから  
はるかにとおざけられて  
かなしみにまるみをあたえる  
となりむらの葬列が  
まどのそとをとおつていく

さんれつしゃはみんな鳥類のよう  
泣ききわまつて 空はゆうやけ  
とどこおることなくくすんだ朱色に  
ぬばたまのゆうやみがちかづいてくるので  
もういまはひらいた口をとじて  
にぎった手をひらいてやらねば

てぬいのしろしろうぞくをきて  
そらのふちへとのぼつていくのは  
ひとすじのやきばのけむり  
ときはひとびとのかんじょうを  
おしながし おおらかにすぎてゆく  
おとこのこならやきゆうぼう  
おんなのこにはリボンをつけて  
やっとはじまろうとしてひくく  
ひくい読経のこえ  
しのびなきはさらにひくく

いくつかの懺悔のなかから  
どうしてもゆるされない  
告白がひとつだけ  
きえうせた赤子の  
なきごえにまじり  
血のにじむ乳のいろ  
はきもどしては  
皮膚がつめたくなるまえに  
くにざかいのむこうの彼岸から



舟橋 空兎  
ふなはし くうと  
名古屋市生まれ 愛知県在住  
2010年 第6回「文芸思潮」現代詩賞 奨励賞  
13年 第一詩集『蝶の水葬』  
14年 第10回「文芸思潮」現代詩賞 奨励賞  
15年 第二詩集『それを詩とよびたければ』

うまれそだったふるさとへと  
地層ふかくうめられ  
なまえさえあたえられぬはかなさ  
いきまどうつらさをしのいで  
淘汰されるにくしみをのみこみ

あやうくすべりおちる胎芽  
鼓動もはやきこえてはこず  
いつしか生のリズムはとぎれ  
とぎれたましがみつぎ  
放蕩している円環に  
へその緒がからみつぎ  
はたしてさいしょのなぞは

なぞのまま埋葬される  
ことばのみえないかおだち  
うしろすがた そのあゆみへと  
ゆがみはじめたら  
消尽点までおしつぶされ

こばまれては恥ずかしげに  
むこうがわのことばでなげく

ひとのかたちになれないことのいらだち  
かけだしては  
急にたちどまり  
その場でどしゃぶりの雨にうたれている

沈黙の底にたちつくす  
夕風はきずあとのように  
みみたぶをやさしくなで  
死鬼のかたちにくりぬかれた閃光が  
盲目のひとみをいぬき  
過去をたどろうとすれば

そくぎに暴発して  
子宮へはもうもどれない  
もどれないさだめ

### 受賞の言葉

このたびは、すばらしい賞に選んでいただきまして、まことにありがとうございます。詩作をはじめたのは学生の頃。その後長い中断をはさみ、ふたたび開始したおりに、奨励賞をいただき、たいへん励みになりました。そして今回の優秀賞。再度勇気づけられた思いがいたします。

松尾真由美氏、五十嵐勉氏、そして関係各位に、心からお礼もうしあげます。



# 一周、あるいは一瞬で季節はめぐる

桜川涼子

観覧車が止まらない  
止まらない観覧車を怖れる少年がいる  
少年の得体の知れない震えを支えている運動靴がある  
運動靴に踏まれたシロツメクサの残骸がある  
シロツメクサの残骸を摘んで泣いている幼子がいる  
泣いている幼子を目掛けて首輪の外れた犬が走る  
走る犬の両耳に嬉々として春が滴る  
滴る春はソフトクリームに光の粒をまぶす  
光の粒は少女の唇から首筋へと流れ鎖骨のくぼみに落ちる

鎖骨のくぼみは怖れる少年の吐息を引き寄せる  
怖れる吐息がついに沸点を超える  
沸点からは夏が噴き出す  
噴き出した夏はふたりの水晶体を結びつける  
水晶体の湿度からちりちり陽炎がたつ  
陽炎の恋が  
観覧車に乗る  
得体の知れない震えをふたつ乗せて  
観覧車が動き出す



桜川涼子

さくらがわ りょうこ  
宮崎市生まれ 佐賀県在住 佐賀県文学賞詩部門  
一席 (1990年)  
詩集「みずのからだ」上梓 (2000年) 同人誌「城」  
「ペン人」「扉」「滾滾」「水脈」所属 私学教員

## 受賞のつば

いくつになっても思春期心性が残っている。若い人  
たちと接している仕事柄かもしれない。細々と詩を書  
き続けてきた先に、どきどきしながらチャレンジした  
後に、ご褒美を頂いた。受賞の知らせを聞いてから、  
五十歳を過ぎても褒められることがこんなに嬉しいも  
のだと実感した。再び、詩を書き始めた頃の初心に戻  
ろう。私の詩を感じてくださり、審査くださった先生  
に感謝したい。